

# 島根県隠岐郡五箇村方言の性向語彙における造語法(2)

## －形容詞と形容動詞の語形成法－

灰 谷 謙 二

### 1 はじめに

本稿は島根県隠岐郡五箇村方言の性向語彙を全的に記述し、その語彙体系にどのような地域的特性と、普遍性があるのかを究明することをめざし、その前段階として、当該方言の性向語彙にみられる語形成法のパターンから概念化のパターンを掃納しようとするものである。

五箇村方言の性向語彙のうち、形容詞と形容動詞に関わる語彙の派生形式を類型化し、それぞれに語形成・派生の上でどのような特徴をもつかを明らかにする。そのうえで、人の恒常的性質・行動癖をとらえて表現し、それを対人評価という行動の中で言語化し、枠組みに組み込みながら一つの語彙群を形成するに至る行為の具体的な過程がどのように言語の外形に反映されるかを明らかにすることを目的とする。

#### 1.1 方法

##### 1.1.1 作業原則

基本的な作業仮説として、対象世界を言語化し抽象化する最も典型的な文法的形態は名詞であるとする。例えば、歩行行為に対して、「アルク」という活用語としての段階と、「アルキ」という連用形転成名詞化の段階がある。人の行為・行動という語彙の枠組みにおける概念の抽象度は素材概念を表示する以外、構文的職能をもたないという点で名詞化された後者のほうがより高度であると考えられる。

如上の作業仮説に立ち、当該方言の性向語彙が原型からどのような手順で派生・品詞転成を起こし「そのような人」であるという「人」概念を形成していくかを観察する。

この「人」概念の形成過程を「概念化」と呼ぶこととする。「概念化」とは、一回的・場面制約的な具体的表現が、社会的な経験の共有を背景にして文脈を離れ、ある語彙群のなかで明確な位置づけをされ、抽象的な要素へ上昇することを指すこととする。例えば、次のような段階で概念化は進むと考える。

「あいつがく嘘をついた」(具体的な一回的場面の描写)

「あいつはく嘘をつく」(場面をはなれた恒常的性向の描写)

「あいつはく嘘つきだ」(恒常的性向の抽象化)

最終的に概念化が進むと活用語は名詞化すると考えられる。このような概念化の過程に具体的な語構成法がどのような形で反映するかを明らかにし、性向語彙に観察される、我々の対人把握・理解とその表現のありかたを究明したい。地域生活者が人(世界)をどのように見、捉えているかを具体的な語づくりの方策から観察しようとするものである。

活用語の転成名詞と考えられるものと、その原型となる活用語が併存する場合は、基本的に原型のものから転成名詞が派生したと考える。名詞が活用語化する場合もある<sup>1</sup>がそのような場合は出自と<sup>2</sup>、類似の派生形式の有無をもとに判断する。

「イジワル」の原初の形態は「イジガ ワルイ」であると推定される。しかし今回の調査では「イジガ ワルイ」という形態は認められなかった。そのような場合は( )に括弧をつけて想定型として示す。

各語の意味内容の記述については拙稿1999と同様、室山1987に示された性向語彙のシソーラスに従いそこに付与された番号を示すことで代用することとする。

そのうえで、大きく出自を基準に、名詞系・動詞系・形容詞系・形容動詞系の4系に分け、本稿では形容詞系と形容動詞系のものを選び、ここに見られる語形成法の類型を帰納する<sup>3</sup>。

### 1. 1. 2 先行研究との関係

隠岐方言の全的記述を行ったものとして神部1978がある。ここでは体系記述・前編第三章語彙面第四節生活者語彙3. 性向語彙の中で29項目207語の性向語彙が記述されている。性向語彙のみの記述をねらうものではないので、量的には多いものではないが本調査に20年余先立つ語彙調査であり、参考語形として事前に調査票へ盛り込むとともに、得られた語形の時代性を判断する資料とすることが多くあった。

性向語彙研究のシソーラスとしては室山1998の中で示されたものが最も新しく完成度が高い。「個別の方言社会を越えた一般性の高い性向語彙の全体的な概念枠の構造<sup>4</sup>」であり「一応はどの方言社会の性向語彙の体系的記述にも、また、複数の方言社会の性向語彙の比較研究にも適用可能な分類体系として扱い得る内容のもの」である。

しかし、例えば「働き者」を「仕事の上手な人」と「仕事の早い人・要領のよい人」に弁別しようとする意識はインフォーマントには希薄な場合がある。大きく「よく働く人・仕事のできる人をどういうか」と大きく聞いて、実際どのような人かを具体的に尋ね、しかる後に細分化されるべきを細分化するという方法をとることが有効な場合がある。ここでは調査時間の便宜も図り、室山1987のシソーラスを用いた。こちらは72意味項目になる<sup>5</sup>。

今回の調査では最終的に異なり語として764事象<sup>6</sup>を得た。調査に用いたシソーラスは以下のものである。本稿では特に断らない限り、各語形の意味はこのシソーラスの番号で

表すこととする。

1) 働き者2) 要領の良い人3) 仕事を丁寧にする人4) 熱中する人5) 辛抱強い人6) 仕事をしない人7) 放蕩者8) 仕事の下手な人9) 仕事を雑にする人10) きれい好きな人11) 必要以上にきれい好きな人12) 片づけの悪い人13) 無精者14) 沈着な人・落ち着いた人15) 呑気な人16) 豪胆な人・図太い人17) 落ち着きのない人18) じっとしてられないであれこれする人19) 気分の変わりやすい人20) 小心な人・臆病な人21) 内弁慶な人22) 遠慮深い人23) いたずら者24) 臍白小僧・始末に負えない子25) おてんば26) わがまま27) 調子乗り28) 滑稽な人29) 物見高い人30) 冒険好きな人31) 怒りっぽい人32) 涙もろい人・よく泣く人33) 寒がりな人34) 食欲の異常な人・意地汚い人35) 大酒のみ・酔っぱらい36) 欲の深い人37) けちな人38) 世話好き39) 出しゃばりな人40) 愛想のよい人41) 無愛想な人42) 見栄を張る人・外見を取り繕う人43) 自慢をする人44) 異性に対して関心の強い人45) 口数の多い人・よくしゃべる人46) 口の達者な人47) 無口な人48) 嘘つき49) 口から出せをいう人50) 誇大家51) お世辞を言う人52) 評判言いい53) 悪意のあることを言う人54) 口やかましい人・他人のことを口出しする人55) 理屈っぽい人56) 不平を言う人57) 堅物58) 強情な人・頑固者59) 厳しい人60) 賢い人61) ずる賢い人62) 見識の広い人63) 馬鹿者64) 世間知らず・非常識者65) 人付き合いの悪い人66) 人格的に優れた人67) あっさりした人68) 誠実な人69) お人好し70) ひねくれ者71) 性悪な人72) しつこい人

資料・調査の概要については拙稿1999を参照されたい。

### 1. 1. 3 作業方針

調査時の語彙採録基準としては、品詞論的な観点にはこだわらず、句的なものや文表現と未分化なものも傾向語彙として広く採集した。整理の段階で場面・文脈の制約をはなれて抽象化されていると考えられるものを語彙事象としてとりあげた。具体的には眼前の相手の行為行動を評価するというものでなく、多くはその場にはいない第三者を批評する表現のなかに認められるものであることが一つの基準になる。

以下、形容詞を一語単独型のものと同形態のものに分け、さらに各々の非転成形態と転成形態にどのようなものがあるか。そこにどのような傾向が認められるかを整理する。

次に形容動詞は、ナ終止のものと同終止のものを分別し、ナ終止に関わって、～ナヒト型が併用されるもの、～ナヒト型でしか言われないものについての分析を加える。

なお、文例・語例ともにアクセント表記を省いた。

## 2 形容詞系

眼前の行為・行動を述べた形容詞はパロル的な存在にすぎないが、場面を離れ、恒常的な性格・行動癖を抽象化して表現したものを取り上げる。具体的には「あいつは～だ」「ありゃ～から」のような文例があつて、直接的に相手に言うものではないことを条件にする。

### 2. 1 一語形容詞

たとえば次の文例のように形容詞が連体形などでなく単独で傾向語彙として用いられているものである。

○アリヤ ナガイケー。アリヤ ナニシテモ ナガイ。

あいつは呑気だから。あいつは何をしても呑気だ。

○アイツワ ネバイケ ナー。

あいつはねばい（熱中する）からなあ。

以下これに類するものを列挙する。

アツカマシー16/72, オゼー・オゾイ60, オツデー・オツドイ8/15, <sup>7</sup>カシケー・カシ  
コイ2/60, カタグルシー57, ガメツイ36/37, キツイ59, クドイ55, コシー61, コス  
イ37/61, コマイ37, シェワイ72, シプトイ・シプター58/70/72, シワイ・シワエ  
58/72, ズーズーシー16, ススドイ・ススドー18, ズプター・ズプトイ16/72, ズルイ  
58/61, テシャイ3/24, トドシー8, トレー15, ナガイ15, ネットイ4, ネバイ・ネベー  
58/70/72, ハシカイ・ハシカエー61, マター・マタイ・マタエ57ヤウエー68,

音訛形を統合して27語種が認められる。すべて和語出自のものである。後述する句形態  
の形容詞では「○○がイー」等の形で漢語が取り入れられるが、一語形容詞では漢語にイ  
語尾をつけるような造語はほとんどみられない。和語・漢語混淆形の「テシャイ（手者い）  
3, 24,」が僅かにそれに類する語形成をみせる。接辞を用いた派生形としては、接頭辞と  
して「エキ・シチ・トチ」がある。

エキヤカマシ54, シチヤカマシ58, シチクドイ58/70/72, トチクドイ58,

また接中辞的なものとしては次例のように「クタ」を補入するものがある。クタイで形  
容詞化接尾辞とするべきものかもしれない。

アライ → アラクタイ・アラクテター9/31,

ズルイ → ズルクタイ16/58/61

形容詞化接尾辞としては、「クサイ・ラシー・カレー」があがる。

ドンクサイ15, シェワラシー・シェワラシ45/54/72, <sup>8</sup>シシラシー・シェシェラシー  
17/18, コスカレー61,

## 2. 1. 1 人要素の付与

### 2. 1. 2 非転成型=ヒト

形容詞で表されるヒトの性向すなわち状態の表現を、そのような性質を恒常的に持つ人としてモノ化するには、人要素が付与される。これが連体形+ヒトの形であり、あるいは～ヤ（屋）、～カ（家）の接尾辞であるといえる。この形容詞単独の性向語彙には次節に述べる名詞転成をみせたヤカマシヤ以外、接辞によるヒト要素の付与は行われていない。最も単純な連体形+ヒトの形が選ばれる。造語のさかえにくい形態である。また、先の形容詞が終止形で用いられる場合とヒトがつく場合を比較しても終止形：連体形+ヒト=26：16となり、終止形での使用がヒト付与型を凌ぐ。

終止形		ヒト形	意味項目
イ（エ）ライ	→	エライヒ（フ）ト	60/66
カテー	→	カテーヒト	57/58/68
キビシー	→	キビシーヒト	59
シツコイ			
・シツッコイ			
・シチコイ	→	シツコイ ヒト	72
ガマシ	→	ガマシー ヤツ	16/34/36
オトナシー	→	オトナシー ヒト	
	→	オトナシ	14/22/47/68
スタコイ	→	スタコイ ヤツ	61
(リクツガマシー)	→	リクツガマシー フト	
	→	リクツ	55
(オモシロイ)	→	オモシロイ ヒト	28/30
		オモシレー ヒト	7/28/30
(ケビシー)	→	ケビシー フト	59
(カルイ)	→	カルイ ヒト	17
(ムツカシ)	→	ムツカシ ヒト	9
(ウルサイ)	→	ウルサイ ヒト	54/55/59
(イー)	→	イーヒト	10/30/40/60
		エーフト	40/68/69

スタコイについてはスタク→スタクナ61のスタクに接尾辞が付与されたものかとも思われるが未詳である。人を表す要素はヒト・ヤツのみで、モン・モノ・オトコ・オナゴなどの要素は現れない。この点、形容動詞などでの現れ方と比べて平板である。

### 2. 1. 3 転成型=転成名詞型

形容詞が単独で用いられる（「あいつは〇〇い」となって、「あいつは〇〇が〇〇い」のような句で用いられない）場合には名詞への品詞転成もほとんどおこらない。わずかにヤカマシ・オトナシの2語があがるのみである。

原型		名詞転成		人要素の付与	意味
ヤカマシー	→	ヤカマシ	→	ヤカマシヤ	19/55/59
オトナシー	→	オトナシ	→	オトナシー フト	14/22/47/68

これを見てわかるように、転成名詞化したものでさらに人を表す接尾辞がついたものはヤのみである。動詞系・名詞系の性向語彙では、「モン・ヤ・ニン・シ・カ・ハラ・サク・スケ・ポー・シャ・ガタ・シャー・シヨ・サン・ピソ・ペー・ペー・マ」の18種の人化接尾辞が現れた(拙稿1999)。連体形+ヒトが終止形よりも榮えていないことと合わせて考えても、単独形容詞の世界は性向語彙として「人」の概念をあたえようとする造語意識が弱いように見受けられる。

## 2. 2 句型形容詞

句形態のものは形容詞単独のものに対して、「○○が良い」「○○が悪い」のように名詞相当のものを形容詞で評価する形のものである。後部要素形容詞には「イー・ワルイ」をはじめとして「ツヨイ」「コマイ・フトイ」「ウマイ・ヘタクソ<sup>9</sup>」「キタナイ」「ヒロイ・セマイ」「オモタイ」「ナイ・アル<sup>10</sup>」「ナガイ」「アツイ」「タカイ」の16種の形容詞が認められる。量的には「イー・ワルイ」の軸で評価されるものが33例、その他の形容詞が18例となり基本的にこの形で表現される性向は「良・悪」の枠を基本として構成されていることが分かる。

### (いい・わるい)

アイキョーガ エー40, アエソーガ イー40, アエソーガ ワリー41, ウチズマイガ ワルイ21, ウチズミーガ ワルイ, ウチズメガ ワルイ, キノベガ イー15, キモガ エー16, クセガ ワルイ44, クチマエガ イー(エー)46, グメンガ エー2, コンガ イー5, シャーガ ワリー23/71, シンポーガ イー・エー5, セーリセートンガ ワリー12, ダンドリガ エー2, ツキアイガ ワリー65, ツキアイノ イー40, ツキガ ワリー41, テツポチガ ワリー8, テメガ イー・テメガ エー1/2, トリツキガ ワルイ65, ニンゲガ ワルイ55, ニンゲノ ワルイ71, ニンゲンガ イー69, ノベガ イー15, ノベノ イー15, ヒトズキアエガ イー40, ヒトメガ ワルイ20, ヒョーバンガ ワリー52, ヒンガ イー14, フトズキアエノ ワリー41, ヨーリョーガ ワリー12, ヨッテツキガ ワリー41, ヨリツキガ ワリー41/65,

### (良い悪い以外)

アエキョーガ ナイ41, ガガ ツヨイ7/26, カンシャクガ ツヨイ18, キモガ コマイ20, キモガ フテー・フトイ16, クチガ ウマイ46, ヨーリョーガ ヘタクソ12, コンジャガ キシャネー(キタネー・キタナイ)34/36/71, シェケンガ ヒロイ62,

シェケンガ シェマイ64, ジガ ツヨイ7, シリガ オモテー15, ジンボーガ アル  
66, ソツガ ナイ10, テガ ナガイ (盗癖がある), ドージョーガ アツイ32, ノー  
ガ ネー63, プライドガ タカイ29,

先に見た一語形容詞の場合、漢語の使用は皆無であったが、ここに来て前部要素に以下の漢語が現れる。

愛嬌・愛想・具面・根・性(チャー)・人望・辛抱・整理整頓・人間・評判・品・要  
領・癩癩・根性(コンジャ)・世間・自・同情・能

どれも、みたまを具体的に描写するような状態をいうものではなく、総合的で抽象的な性格・性質の意味内容をもつものである。一語形容詞が26例に対し、こちらが51例となるのをみても、形容詞を性向語彙として用いる場合、漢語の抽象性が有効に働いていることが見て取れる。逆にいえば漢語がなければ、形容詞系の性向語彙は具体の方向に偏った極めて表現の幅の狭いものになると考えられよう。

### 2. 3 非転成型=ヒト

句型形容詞に「人」がついたものをみる。

〈良い・悪い〉

アイキョーノ エー	→	アエキョーノ エー フト	40
ヨーリョーガ イ(エ)ー	→	ヨーリョーガ イー ヒト	2
(ヨーリョーノ エー)	→	ヨーリョーノ エー ヤツ	2
(コンキノ イー)		コンキノ イー ヒト	5
(ツキアイノ イー)	→	ツキアイ(エ)ノ ワルイ ヒ(フト)	41

〈良い・悪い以外〉

(アイソノ ナイ)		アエソノ ナイ ヒト	41
オチツキガ ナイ・ネー	→	オチツキノ ナイ ヒト	17/18
(シゴト キタネー)		シゴト キタネー ヒト	59
(マチガイノ ナイ)		マチガイノ ナイ ヒト	66

要領の良い「ヒト」か「ヤツ」かなどの差を細かく見ても9例になり一語形容詞のヒト付与よりもさらにヒト要素付与の頻度は低くなる。漢語の使用という面では一語形容詞よりも造語力のつよい形態であるということではできるが、あくまで状態を表現するものであって、人概念をとって抽象化する方向には進みにくい品詞であると言うことになりそうである。

## 2. 4 転成型=転成名詞

基本的に、形容詞は一語であろうと、句形態であろうと、人要素を積極的に取ろうとしないものであることをみてきた。ここでは、僅かながら名詞転成を見せた例をあげる。また、句形態の助詞が脱落し、一語形容詞化したものもあわせてみることにする。これは句形態が、転成名詞化する途中段階と見られるものである。

原型	助詞脱落	名詞転成	意味
(一語形容詞化)			
(クイ様がキタナイ)	クイキタナイ		34
(クチがヤカマシー)	クチヤカマシー		54/55
(ナミダがモロイ)	ナミダモロイ		32
(ワルがカタイ)	ワルガタイ		3
(コラエがツヨイ)	コラエズヨイ		5
(カンジョーにハシカイー)	カンジョーバシカエー		
(ニンゲンがカタイ)	ニンゲンカタイ		68
(転成名詞化)			
(キがミジカイ)	→ キミジカイ	→ キミジカ	17/31
ケンガ タカイ	→ ケンダケー	→ ケンダカ	294/243
(ヨクがフカイ)	→ ヨクブカイ	→ ヨクブカ	36/37
(コシがカルイ)	→ コシガルイ	→ コシガル	38
シリガ カリー	→ シリガリー	→ シリガル	38/44
キモガ ホシエー		→ キモボソ	20
アエソーガ (ノ) イー		→ アエソーヨシ	40
シャーガ ワリー		→ シャーワル	23/71
コンジャガ ワリー		→ コンジャワル	26・34・71
(イジがワルイ)		→ イジワル	71
(ヒトガエー)		→ オヒトヨシ	68/69

助詞脱落をおこすものは、「良い・悪い」形容詞以外のものになる。「良い・悪い」形容詞は意味的に融合し一語化しにくいものといえる。名詞転成では「ミジカ・ダカ・ブカ・ガル・ボソ・」と「ヨシ・ワル」の計7種11語の転成が起こっている。基本的に転成したときのモーラ数が4以下であるものとなっており、一定の造語規則としてモーラ数制限が働いているようである。ただし、助詞脱落がない「ヨシ・ワル」に関しては前部要素が4モーラ以下ということになる。中間段階とみた助詞脱落が現れないこととあわせても、他の形容詞に比べて前部要素との意味の切れ目が強く独立性が強いと言えそうである。

助詞脱落のような転成名詞への中間段階形式の他に、連濁の現れ方にも一語化の中間的な過程が観察されるものがある。助詞脱落を起こす段階で、すでに後部要素は「ガタイ(堅い)」「ズヨイ(強い)」「バシカエー(はしかい)」「ダケー(高い)」「ブカイ(深い)」「ガルイ(軽い)」と連濁を起こすが、中に、「クイキタナイ」「ニンゲンカタイ」のような非連濁形が現れる。後部要素形容詞の連濁ではないが、類似のものとして「ヒトツキアエガ ワリー」のような前部要素の造語要素間の連濁の現れ方に差のでもものもある。

また、和語と漢語の現れ方をみても、和語は「良い・悪い」以外の形容詞と結びつき、漢語は「ヨシ・ワル」と結びつくというようなことがあるいは言えるかも知れない。

以上、みてきたように、形容詞をもとにする性向語彙は、一語形容詞であっても、句形態形容詞であっても人要素を積極的に付与し、人概念をとりこんで概念化しようとする働きは強くないことが予想される。参考までに同じく活用語である動詞の転成名詞化を見ると以下のような状況である。非転成か転成かということだけでいえば、動詞は94:45、形容詞は101:13となる。数値で比較することによりあまり意味はないが、やはり動詞のほうが転成率が高いということは言える。

一語動詞	19	一語形容詞	27
アスペクト付与形	20	一語+ヒト	14
否定助動詞付与形	40	句形容詞	51
句形態	15	句形容詞+ヒト	9
一語・転成	17	一語・転成	2
一語・転成・接辞付与	3	句・転成	11
句形・転成	25		

また、一語形容詞は和語であるのに対し、句形態形容詞は漢語が盛んに用いられ「良い・悪い」を中心軸とする形容詞と結びついて語数を増やしていることがわかった。

### 3 形容動詞

ここでは、形容動詞をとりあげる。名詞+指定断定の助動詞とどう弁別するかが問題になるが、ここではナで終止するものをまず取り上げ、タ終止のものは文例が得られたものをあげた。拙稿1999で名詞としたものの中はこれに連続的なものがある。

#### 3.1 ナ終止型

共通語的文法観でみれば、形容動詞の連体形が単独で終止形化したものといえる。この形態について藤原1986<sup>11</sup>では次のように扱う。

このような、「～ナ」の成語を、今は、「～ナリ」の文語形容動詞形に比照して、やはり形容動詞とよぶことにする。

(中略)

「ナ」を加えて一語をつくっているのであるから、私どもは、一語にした人間の心を重視しなくてはならない。「元気な」に関して終止形の「元気だ」が考えられたらいい、「だ」とあるので、これを指定断定の助動詞と見、「元気」と「だ」とをわける考えがあるが、いまは、「元気な」の一成態をつくりあげたところがだいいである。つくりあげたものは、それを一体として見なくてはならない。

筆者もこの考えに従いたい。仮にダの連体形であるという立場で考えると、ヒトを連体修飾するナ形がヒトを省略した、ないしはゼロ形態であり、あくまでヒト・モノ・コト等の存在を前提とするということになる。しかしながら次の一對の文例は等価のものになる。ナ形のを「あれは横着なヒトだから」とは訳せない<sup>12</sup>。やはり双方とも、「横着だ」「横着だから」となりそこには「ヒト」を補う必要がない。

○アレワ オーチャクダ。

○アリヤ オーチャクナケー。

ではこのような「ダ」終止と「ナ」終止が併存する理由は何か、そこにはどのような表現上の違いがあるのかといったことが問題になる。上の当該例はここでは「ダ」形をあわせもつものとして純粋な「ナ」終止の例とは分けて扱うが両者を概念化の観点から定位させる必要がある。これについては後述する。

連体形ではないナ終止が確例として認められる文例はつぎのようなものである。

コーシャナ (巧者) 2	○アノ バーサン コーシャナケー。
セワナ (世話) 1	○アノ ヒト セワナ ワノーツテ ユー ネー。
メンダナ (面倒) 54	○アラ メンダナケン。
ヤボ (野暮) 30	○アラ ヤボナケン。無茶
ヨクナ (欲) 36	○アラ ヨクナケン。 →ヨクスッペ

文例が無いがナ形終止のみがあらわれたものは次の例である。

イーカゲンナ (いい加減) 9, エキビシャーナ (えき無精) 13, エチガエナ (一概) 26/58, エツコクナ (一刻) 26/58, オーゲサナ (大袈裟) 50, オーラカナ15, カンシヨーナ (癩性) 31, キサクナ68, キメンナ3, ケーハクナ (軽薄) 17, ゲンカクナ (厳格) 59, ゴータンナ (剛胆) 16, ゴーチョクナ (剛直) 16/58, ザツナ (雑) 9, シチオーチャクナ (しち横着) 13, シトヤカナ68, ショージキナ (正直) 68/69, ジョーヒンナ (上品) 14, ソツナ12, タンキナ (短気) 17, ニッシンナ (熱心) 4, ノーテンキナ (脳天気) 15, ノデンキナ (脳天気) 15, ハツメーナ (発明) 1/60, ハヤエキナ18, ビシャーナ (無精) 13, , ブエテナ (不得手) 8, フシダラナ<sup>13</sup>7/8/44, ヘダラク (へ墮落) 12/13/44, マーナ15, マスグナ68, ミダラナ44, ユーベンナ (雄弁な) 46, ランバナ (乱暴) 7/9/12,

以上、39例があがる。一見して漢語使用の多いことに気づく。39例中29例に何らかのか

たちで漢語が用いられる。一語形容詞に対して句形容詞に漢語が多くなったが、漢語使用の自在さは形容動詞に、より端的に現れる。いずれも抽象性の高い、見たままの行為行動を具体的に述べるものではなくなる。加えて造語の容易さが漢語形容動詞の生産性を支えている。

### 3. 2 ナ+ヒト型

次に、状態・性質を形容する表現が人を修飾するものをみる。これらは明確に「そのような人」であるという概念が形成されるものである。何らかの形でナ+名詞の形を見せたものを以下の表に示した。派生形態の類型に従って(1)から(4)のグループを認定する。調査時の文例の得方次第でこの空白は埋まる可能性があるので、このグループの弁別に大きな意味をもたせることは危険であるということを前提にそれぞれを意味づけてみたい。

語幹	ナ終止	ナ+ヒト形	ヒト接辞形	意味
<b>グループ(1)</b>				
オーチャク	→ オーチャクナ	→ オーチャクナ ヒト	→ オーチャクモン	6
オクビョー	→ オクビョーナ	→ オクビョーナ ヒト	→ オクビョーモン	20
ジャーシキ	→ ジャーシキナ	→ ジャーシキナ ヒト	→ ジャーシキモン	22/26/58
タテハラ	→ タテハラナ	→ タテハラナ ヒト	→ タテハラモン	31
ヤゴ	→ ヤゴナ	→ ヤゴナ ヒト・ヤツ・オヤジ	→ ヤゴキチ	17/24/26/ 31/58/71
(強情・怒りっぽい)				
<b>グループ(2)</b>				
オーザツバ	→ オーザツバナ	→ オーザツバナ モン		9/12
キゲフゲ	→ キゲフゲナ	→ キゲフゲナ ヒト		19
キチョーメン	→ キチョーメンナ	→ キチョーメンナ ヒト		68
コーシヤ	→ コーシヤナ	→ コーシヤナ ヒト		2
ゴージョー	→ ゴージョーナ	→ ゴージョーナ ヒト		11/26/58
コシヤベ	→ コシヤベナ	→ コシヤベナオ トコ		44/55
シチヨク	→ シチヨクナ	→ シチヨクナ ン		34/36/37
ショシン	→ ショシンナ	→ ショシンナ オトコ		20
スタク	→ スタクナ	→ スタクナ ヤツ		61
マイメ	→ マイメナ	→ マイメナ ヤツ		39/43
マメ	→ マメナ	→ マメナ ヤツ		15
<b>グループ(3)</b>				
ザマク		→ ザマクナ ヤツ		9
ジョーヒン		→ ジョーヒンナ ヒト		14
ヒジョーシキ		→ ヒジョーシキナ フ(ヒ)ト		64
ヘーダラク		→ ヘーダラクナ ヒト・ヤツ		12
ヘーダラク		→ ヘーダラクナ ヒト・ン		12
マジメ		マジメナ フト		68
<b>グループ(4)</b>				
	シェワナ	→ シェワナ ヒト		38
	コマイメナ	→ コマイメナ オトコ		39
	ゲサーナ	→ ゲサーナ ヤツ		44下品
	ガンコナ	→ ガンコナ ヒト		58
	マヨメナ	→ マヨメナ ヒト・ヤツ		42自慢する人
	オーヨーナ (罵搦な)	→ オーヨーナ モン(ヒト)		15
	オーイキナ	→ オーイキナ ヒト		15のんびりした人
	オクビョーナ	→ オクビョーナ ニンゲン		20
	ガ(-)ンコナ	→ ガンコナ ヒト		58
	クチノタツシヤナ	→ クチノタツシヤナ ン		46
	コマイメナ	→ コマイメナ ヤツ(オトコ)		39/43
	シェ(セ)ワナ	→ シェワナ ヒト		38
	シトヤカナ	→ シトヤカナ フト		68
	シャベナ	→ シャベナ ヒト		44
	ソマツナ	→ ソマツナ ニンゲン		9
	タツテキナ	→ タツテキナ ヒト		18/57

表注) ・ヤゴ(強情・怒りっぽい)、ゲサーナ(下品な)、マヨメナ(自慢する)、オーヨーナ(罵搦な)、オーイキナ(のんびりした)  
・「ン」は ○ヘーダラクナ ンダ。(へい堕落なやつだ)のように言う「人」相当の人称代名詞。

オーチャク→オーチャクナ→オーチャクナ ヒト→オーチャクモンのように語幹部分の独立した形態から、形容動詞形、句形態、接辞による名詞化まで四段階の派生形式を見せるグループ(1)がある。語幹部分が回答されたものが形容動詞の語幹を名詞として概念化した最終的な姿であるとみることもできるが、これらが主語の位置に立つような文例は得ていない。おそらく、インフォーマントの心意として切り取られた性向の認識が、このような形になるという理解のほうが適切であろう。「そういうのは『横着』というよ」と回答することと「そういうのは『横着な』というよ」ということに話者としては大きな違いは無い。逆に言えば、表現としての「ナ」形から切り離しうる要素になりえたものということができる。そういう意味で最も概念化の進んだグループであると言えよう。ヒト要素としてはヒト・ヤツ・オヤジが見られるが、接尾辞ではモンとキチのみが現れる。従って「ナ+ヒト」の進化した形がヒト接辞形ではなく、語幹独立の名詞形に名詞が付されたとみたほうが適切であろう。

グループ(2)は(1)に準ずるが人接辞を獲得するには至っていないものと言える。接尾辞を取るグループとの差がどこにあるのかについては今のところ考えが及ばない。強情者、小心者などを想定することは共通語的な感覚では可能であるが、ここにはでてきていない。モーラ数の制限もあろうがそれだけではなからう。(1)になるものは口をついて出る頻度の高いものではないかというような推測も可能であろうが確かにはいえない。

グループ(3)は「ナ終止」が見られなかったグループである。たまたまナ終止の形での回答が得られなかったものであろう。

グループ(4)は「ナ」終止形か「ナ+ヒト」のみが現れたものである。(1)から(3)で語幹部分が独立して回答されたのとあえて違いを言えば、ナを切り離して名詞的な概念を抽象化させるには至っていないものであるということにならう。

全体として言えることとしては、やはり漢語使用の盛んであることがあげられる。漢語出自であることが確かなものをあげただけでも「横着、臆病、常識、おお雑把、機嫌法眼、几帳面、巧者、強情、小心、上品、非常識、へい墮落、世話、下相、頑固、鷹揚、臆病、頑固、達者、粗末」の20種があがる。漢語を好む傾向は基本的に変わらない。

接辞がさかえない点は形容詞と同じである。

### 3. 2. 1 ナ+ヒトでしか言われないもの

例えば「あのヒトはいい人だ」というときに「あのヒトは良い」では恒常的な性質・性格の評価としておさまらない。ヒトをめざして評価が収束する必要がある。話者の主観に支えられたおおくりな評価がされたときは「そのようなヒトだ」と対象を明示した断定が必須になるということであろうか。その目で見れば上述の「ナ」終止のものはより具体的に比較的客観性がたかい状態形容ということにならうか。(1)から(4)にあげたものくらべて明らかに概括的な評価であろうと思われるのは「イヤナ フト」「オカシナ

ヒト・モン」で、これは「ナ」形で終止させることを想定することは難しい。他の例については「ナ」形終止も可能であろうし、文例は得られる可能性も高からう。これについては今後の課題としたい。

キガサナ コ60

キタイナ コ・ン70 ○キタイナ ンダ。

イナゲナ ヤツ70 ○イナゲナ ヤツダ。

イヤナ フト42

エンリヨナ ヒト22 ○エンリヨナ ヒトダガ ノー。

オカシナ ヒト・モン28 ○アンニワ オカシナ モンダケー。

カタモクレナ ヒト・フト ○カタモクレナ フトダケン。

カタモツレナ ヒト55.57

キタイナ コ・ン ○キタイナ ンダ。 70

ゲサーナ ヤツ44

ゲサクナ ヤツ53

ケンドナ ヒト65/71

コスタクナ ヤツ61

コマセナ コ60

コマメナ ヒト68

セージツナ ヒト68

ソーシャナ ヒト22

### 3. 3 ダ終止型 (名詞)

最後に、ダ終止の形容動詞をあげる。前節で形容動詞語幹が特立される(1)から(3)のグループをみた。この語幹が明確に名詞として概念化され断定の助動詞とともに現れたものである。もの様子や状態を表す概念を語幹にもったナ形容動詞が概念化しモノ化した結果いきつくところがこのダ終止ではないか。そして、抽象化の果てにモノ化(名詞化)した語幹部分は逆に具体の表現に展開する。この現れが「ショモ」に対する「ショモイ」の形容動詞化であり、「ヨーシャ」に見られる「ヨーシャスル」のサ変動詞化ではないかと考えられる。

エケズ ○アリヤー エケズダ ゴー。 23/24/25

ショモ ○アレワ ショモダケン ナー。 20・21

→ ショモイ

→ ショモタレ

シャベ ○アラ シャベダ, 44

→ シャベナヒト

タマダレ ○アリヤータマダレダ, 7

→ タマダレナヤツ

ヘンボ ○アイツワ ヘンボダ, 70

→ ヘンボナヤツ

→ ヘンボモノ

ヨーシャ (容赦) ○アレワ ヨーシャダケン, 22

→ ヨーシャナ

→ ヨーシャスル

#### 4 まとめ

ここまで述べてきたことをまとめる。語形成のパターンから概念化の過程をさぐることが本論考のめざすところであった。形容詞・形容動詞それぞれが文法的制約を受けながら、名詞の世界へ抽象化される様子が観察された。

形容詞は名詞化の度合いが弱く、人要素を付与するにも、品詞転成をするにも頻度が低い。とくに一語形容詞は人の概念を取ろうとしない。

句形態形容詞は転成名詞化するが形態・出自の制約を強く受ける。つまり4モーラ以内であること、それ以上ならヨシ・ワルのみで名詞化する。ここで漢語の旺盛な生産性が観察された。総じて言えば、形容詞の世界に語形成法上に観察される概念化の積極的な働きは弱いと言える。

形容動詞では「ナ」終止による形容語化が自在な形で現れる。また「ナ」で終止するものと、「ナ+ヒト」を常とするものの違いを、具体的な状態の形容か、概括的で主観性のつよい評価かの差にもとめられる可能性を指摘した。これについてはさらに検証を重ねる必要がある。

そして「ダ」終止をみせる形態にいたって概念化は行き着き、名詞の世界とリンクすることを示した。

特に形容動詞には形容詞以上に漢語が造語力を発揮している様が認められた。この漢語形容動詞の造語については藤原1986<sup>14</sup>に次のような指摘がある。

その無限製作での名詞利用のさい、ことに漢語（漢字ことば）が自在にとり用いられ、いわゆる漢語系の形容動詞が苦もなく造成されている。

ナ+ヒト形式での人化はあるが、造語の方法は品詞転成をせず、語幹部分を切り離し独立させるかたちでよい。概念化の方法も単純で直接的である。名詞と連続的であり、動

詞・形容詞・形容動詞のなかでもっとも造語力がつよく、かつ概念化の強い分野は形容動詞であるという見方ができる。

形容詞と形容動詞の造語力の差についても藤原1986<sup>15</sup>に次のような指摘がある。

人間の表現生活での、形容修飾の重要さは、あらためて言うまでもないことである。子どもの生活は、一面、形容修飾の世界であるとも考えることができる。ここに形容詞が必要視され、したがってまた、形容動詞が必要視される。

形容修飾の無限の必要にも関わらず、形容詞の製法には、はなはだしい限定がある。これを補う手段とされる形容動詞の製法には、限定というほどのものが、ほとんどない。

これはイ語尾をつけて形容詞を新たに製作することが難しいのに比べてナ語尾をつけて形容動詞が盛んにつくられることを指摘されてのものである。語彙化のパターンに形容詞よりも形容動詞のほうに自在なバリエーションが見られたことと重ね合わせて理解できる現象であろう。

性向語彙の世界で、文が句へ、句が語へと抽象化されていくとき、そこには対象となる性向概念の地域生活者間の共通理解・認識の強化作用が認められる。その最終的なすがたは名詞であると考えた。ここへ直接的にかかわるのが形容動詞であること、そしてそこに漢語という概念の抽象化に格好の形態が関与していることが明らかになってきた。

では、これらの漢語を用いる以前の人物評価はどのようなものだったのか。漢語性向語彙を手に入れることで、地域生活者の対人評価心意はどのような変化をしたのか。そこにはどのような地域差があるか、それはどのように作られていったのか。対人関係のありかたが変化し、対人評価意識そのものも変化したとき、これが造語心意にどのように反映するのかといったことについては今後の課題としたい。

## 参考文献

- 神部 宏泰 (1978)『隠岐方言の研究』風間書房
- 小学館辞典編集部 (1989)『日本方言大辞典』小学館
- 灰谷 謙二 (1999)「島根県隠岐郡五箇村方言の性向語彙における造語法(1) 一名詞系と動詞系の語形成法」  
『広島女学院大学国語国文学誌』第29号
- 藤原 与一 (1986)『統昭和日本語方言の総合的研究第一巻 民間造語法の研究』  
武蔵野書院
- 同 (1997)『日本語方言辞書 -昭和・平成の生活語-』東京堂出版

- 室山 敏昭 (1979)『中国地方方言の性向語彙研究序説』  
 (『広島大学文学部紀要』特輯号1)  
 (1980)『地方人の発想法 くらしと方言』文化評論出版
- 同 (1987)『生活語彙の基礎的研究』和泉書院
- 同 (1992)『方言性向語彙の派生構造とその規程要因』  
 『山口県防府市野島方言について』  
 『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院
- 同 (1998)『生活語彙の構造と地域文化 文化言語学序説』和泉書院

## 注

- 1 「テシャ(手者)」→「テシャイ」等
- 2 基本的に漢語が活用語化する場合
- 3 転成名詞等をいったんすべて名詞の類とし、その下位分類として、動詞系、形容詞系、形容動詞系とする週及的方法もあるが概念化過程を捉えるために原形からの派生という時系列的な観点で整理を行う。
- 4 室山1998p152
- 5 勿論今後意味に関する分析・記述を行う差異は改めて室山1998のシソーラスを用いて整理する必要がある。
- 6 音訛形レベルの差でカウントすれば916事象。句単位のものも語と同列に扱った。
- 7 『日本方言大辞典』は「おつ(乙)粗末なさまくオツドー」とも。東京都八丈島とする。
- 8 『日本方言大辞典』では筑後柳川、島根隠岐、鹿児島
- 9 形容動詞語幹であるが、ウマイとの対義関係に着目してここに含める。
- 10 動詞であるが意味論的な対義関係に着目して例外的にここに含める。
- 11 第十三章 形容動詞の造語法 第一節 形容動詞の生成—形容詞との共生
- 12 安芸郡府中町出身広島市在住の筆者の内省による。ナ終止は筆者の使用方言に含まれる。
- 13 「しだら」について梵語出自・「自墮落」を語源とする等の説があつて未詳。ここでは和語扱いとする。
- 14 p270第十三章形容動詞の造語法 第四節形容修飾の世界
- 15 p269 同前

——はいたに・けんじ、広島女学院大学講師——